

## 『季刊民族学』『文化遺産を再見する』をめぐって」報告要旨

高橋沙奈美(日本学術振興会特別研究員)

寒風吹きすさぶ新潟で行われた「聖地」研究会は、新学術領域「ユーラシア地域大国の比較研究」第6班(文化)の「世界遺産シリーズ」第4弾となった。この「世界遺産組」の結成は2012年3月の研究会「生活空間、場の記憶、ジェンダー、探偵小説—ユーラシア比較文化の試み」に端を発している。第三セッション「世界遺産は誰のもの？」では、ロシアの高橋沙奈美(筑波大)、インドの前島訓子(名古屋大)、中国の小林宏至(首都大東京)とそれぞれの地域研究者が、自分の事例研究を紹介した。その後、ここで報告した3名がひと組になって研究成果を発表する貴重な機会に幾度か恵まれることになった。そのうちのひとつが、先の研究会でコメンテーターを引き受けてくださった、国立民族博物館教授の杉本良男先生のお取り計らいによる『季刊民族学第141号』の特集「文化遺産を再見する」であった。

特集の詳細については、これまでの報告と重複する部分が多かったことと、参加者全員がすでに本文に目を通していたので割愛した。三人ひと組で研究する中で、私にとって常に最大の問題となっていたのは「比較」の枠組みをどうするかという点であった。3つの事例を並列し、その類似点や相違点を並べ立てるだけでも悪くはないが、どうにも能がない。かといって、中途半端な分析の専門用語で飾り立てて見せたところで、事例の面白さを台無しにするだけで無意味に思われた。世界遺産について論じた研究はいくらでもあるが、いずれにしてもそれぞれの事例が興味深い研究対象なのであって、それらを包括して論じることのできるような枠組みというのは管見の限り見つからなかった。一方、現在私が在籍している筑波大学の宗教学専攻では、山中弘教授を中心に聖地研究が盛んに行われている。おりしも2012年にはさまざまな「聖地」を扱った著作が2冊も刊行された(山中弘編『宗教とツーリズム: 聖なるものの変容と持続』世界思想社、星野英紀・山中弘・岡本亮輔編『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂)。そこで、今回の報告の機会を借りて、宗教社会学の立場からの聖地研究の分析枠を紹介し、われわれの事例研究を再考しようというのが、今回の報告の趣旨である。

報告では、「聖地論」とする立場からの、聖地のオーソドックスな定義について簡単に紹介し、また事例に対してどのような立場から分析するのかについて、3つのアプローチを説明した。こうした議論に対し、空間論や都市社会学の立場から場所構築のプロセスを見るとどうなるのかという論点や、聖性を利用するヒトとカネの動きに注目したreligious industryの考え方などが紹介された。また、聖地/観光地が人を引き寄せ続ける永続性についても議論された。ある空間について「定義」された特性が、次第に「実体化」したのち「本質化」されるに至り、再び「再定義」されるという循環型のアプローチがあるのではないかと指摘もなされた。個人的には、ユーラシア地域大国という枠組みを文化の側面から考えるとき、興味深いのは、その周縁性ではないかという杉本先生からの指摘に触発された。世界遺産の議論で問題となった政教分離について考えてみても、西欧諸国では概ね「国家」と「教会」の分離と考えられるのに、周縁では「政治」と「宗教」として捉えられることが多い。そして、宗教学的立場とは少し異なり、地域に密着した研究者として出していくべき成果として、場所に関わる当事者の複数性とそれぞれの聖地表象・語りに耳を傾けることの重要性を再確認した。

今回の熱い議論を、冷めないうちに新学術領域の成果として反映させたいと考える。また、今回の研究会では時間切れのために報告されなかった事例研究を報告する機会を、ぜひとも重ねていきたい。最後になったが、今回の議論、そしてこれに至るまでの議論に参加して下さった方全員と、とりわけこの貴重な機会を作ってくださった第6班メンバーの杉本良男先生、および班長の望月哲男先生に改めて感謝申し上げたい。どうもありがとうございました。